

看護系大学のリメディアル教育の現状と今後の課題

増田 元香, 渋谷 寛美, 今井 亮, 山下 明美, 宮本 さとみ, 横田 素美

文京学院大学 保健医療技術学部 看護学科

要旨

少子化に伴う大学全入時代を迎え、大学生の基礎学力の低下が問題視されつつある。本学看護学科においても、他の大学同様に多くの学生に基礎学力の低下がみられ、看護専門科目や基礎医学系科目の修得に支障をきたしている。リメディアル教育とは、大学生の基礎的な学力を補う目的で始められた取り組みである。看護系大学におけるリメディアル教育の現状を調査したところ、理科学科と国語についてリメディアル教育が実施されており、入学後の学力試験の成績によって対象者を選定していることが明らかとなった。一方で、本学看護学科では、少人数制による学習支援を実施するのみで、リメディアル教育的な要素を含む科目を必修科目としておらず、対象者の選定を行っていなかった。今後、看護系大学が、リメディアル教育に本格的に取り組むためには、教員間の共通認識を高めるとともに、全学年を対象としたリメディアル教育プログラムを構築し、学習環境の整備を含めた学生への支援体制の充実に計ることが重要である。

キーワード

基礎学力, コンピテンシー, 学習支援体制, 学習環境

1. 緒言

2008年12月、文部科学省中央教育審議会から「学士課程教育の構築に向けて(答申)」が発表された¹⁾。そのなかには、各大学が目指すべき多くの指標が盛り込まれており、大学全入化に伴い、学生の学習意欲と目的意識が低下するなか、大学はアドミッション・ポリシー(admission policy)、カリキュラム・ポリシー(curriculum policy)、ディプロマ・ポリシー(diploma policy)を明確化すべきであると述べられている。また、初年次教育、およびリメディアル教育の充実についても述べられており、特にリメディアル教育を「大学教育を受ける前提となる基礎的な知識等についての教育」として定義し、学力の高くない学生に対する入学後の補習ならびに補完教育の取り組みとして、その必要性が述べられている。

近年、日本の多くの大学では、入学時の学生の基礎学力低下が問題視されつつあり、入学前教育、初年次教育、リメディアル教育などを実施する大学が増えつつある。これらは各大学独自の取り組みとなっており、大学の運営するウェブサイトなどで一部公開されたり、教育評価研究として発表されたりしてきたが、リメディアル教育に関する組織的な研究、および具体的な対応策の共有にまで至っていなかった。しかしながら、2005年に日本リメディアル教

育学会が発足したことにより、全国の大学におけるリメディアル教育の研究と成果の共有が可能となった。また日本における多くの大学において、リメディアル教育の必要性が叫ばれるようになった背景には、上述した大学への全入化に加え、入試の多様化により、高等学校卒業までの基礎学力を十分に修得できていない学生が、大学に進学できるようになった社会的要因が指摘されている^{2),3)}。

こうした背景から入学時の学生の基礎学力は年々低下している。大学における授業内容を理解できないため、学習意欲が低下し、自分の将来への希望を見出せなくなる学生の数は、増加の一途をたどっている。加えて、大学で学ぶに足る十分な基礎学力をもたずに入学してきた学生は、大学が求める学修目標に到達できない確率も高く、留年および中途退学に至る事例も多い⁴⁾。つまり、学生の基礎学力の低下現象は、本人の人生設計に狂いを生じさせるだけでなく、学費負担増も招き、保護者の家計にも影響しかねない側面を持つ。一方、大学側にとっても、補講対象者や再試験対象者の増加に伴い、教育業務はより煩雑化し、教職員の負担は増えている。特に職能教育を担う学部・学科においては、国家資格等を取得できる知識・技術・思考の修得を学生に課さざるを得ないため、必然的に各授業科目の目標到達への評価も厳しくなり、授業内容を理解できない学生が単位取得できず留年となる事態が大きな問題となっ

ている。本学看護学科でもこうした問題に直面しており、入学前教育をはじめ入学後のプレースメントテスト、初年次教育、リメディアル教育の整備と強化の必要性を教員側は認識し、すでに学部単位・学科単位で取り組んでいるものもあるが、未だ組織的あるいは構造的な教育評価には至っていない。

このような現状を鑑みて、本稿では、看護系大学および本学看護学科におけるリメディアル教育の具体的な内容を明らかにし、本学も含めた、看護系大学でのリメディアル教育の今後の在り方を検討した。

2. 看護系大学におけるリメディアル教育

看護系大学におけるリメディアル教育の特徴と課題を把握するため、まず国内医学論文情報のインターネット検索サービスである医中誌Web（医学中央雑誌刊行会 <https://www.jamas.or.jp/>）を用いて検索を行った。「リメディアル教育」をキーワードに入れ、会議録を除いた文献の検索を行ったところ、20件がヒットした。しかしながら、この中には看護系の文献は3件（内訳は、原著論文2件および総説1件）しか存在しなかった^{2), 5), 6)}。そこで、さらにCiNii Articles（国立情報学研究所 <https://ci.nii.ac.jp/>）とJ-STAGE論文検索（科学技術振興機構 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>）を用いて、「リメディアル教育」「看護」をキーワードとして検索を行ったところ、追加で2件（内訳は、原著論文2件）が見つかった^{7), 8)}。以上をまとめると、看護系のリメディアル教育に関して、国内で発表された原著論文および総説は、わずか5件にとどまっており、リメディアル教育に関する研究や報告が、未だ発展途上段階にあることが示唆された。各大学が行っているリメディアル教育の実態およびその内容は、大学の運営するウェブサイトなどに学習支援の1つとして掲載され、論文として発表されていない可能性がある。上記の原著論文と総説のみでは、リメディアル教育の実態を十分に把握するためには、例数が少ないことが懸念されたが、発表された文献からは、具体的で詳細な内容の記載が期待できることから、得られた上記の文献を中心に、看護系大学におけるリメディアル教育の概要を探ることとした。

看護系大学におけるリメディアル教育として実施されていた科目は、理科科目の化学、生物、物理^{2), 5), 7)}と国語^{6), 8)}であった。解剖学、生理学、生化学、ならびに

病態治療学といった専門基礎科目を学ぶうえで、これらの理科科目の知識は基盤となっており、この基礎知識を修得せずに上記の専門基礎科目の内容を理解することは、事実上困難である。そのため、入学前後に行われたプレースメントテストなどの学力試験、対象科目の試験等で低成績だった学生を、リメディアル教育の対象者として選定していた^{6), 7), 8)}。また、全員を対象とする例、もしくは希望者のみを対象とする例があった^{2), 5)}。使用する教材としては、高校生向けの参考書である「ステップアップ生物」、「ステップアップ化学」、「レッツトライノート生物I」「レッツトライノート化学」（全て東京書籍）といった書籍を活用し、その中から教員が、「物質の構成」「化学結合」といった基礎項目を選出して使用していた²⁾。このほか、初年次教育として国語を取り入れる例もみられた⁸⁾。

3. 本学看護学科の取り組み

本学看護学科は2014年4月に開設された。2018年の3月には第1回生が卒業し、看護師国家試験に全員が合格した。2018年度からカリキュラムが改訂され、現在はその新しいカリキュラムに則り、教育活動を進めつつある。

看護学では、解剖学、生理学、薬理学といった理数系の知識を基盤として学ぶ科目が多く、これらの科目を確実に修得するためには、中学校・高等学校で学ぶ理数系科目の基礎学力が重要となる。2014年から2017年度入学生まで適応された旧カリキュラムでは、「物理学」、「化学」、「生物学」、「数学」、以上4つの理数系の基礎科目が、一般教養科目領域の1つである「人間の生活と社会の理解および科学的思考の基礎」の中に設置されていた。このうち「生物」だけが必修科目であり、他の科目は選択科目に設定されていた。そのため、残り3つの理数系科目を選択する学生は、4年間の平均で全体の33.5%に過ぎず、多くの学生は他の選択科目を履修していた（表1）。このように、選

表1 本学看護学科 選択科目履修者数

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	計
物理	17	8	35	43	103
化学	0	5	0	0	5
数学	18	8	0	0	26
地球環境論	18	8	1	2	29
保健体育学	67	50	43	47	207
哲学	4	4	7	0	15
法学	64	62	35	53	214
医療心理学	3年次開講	3年次開講	13	10	23

択科目に入っている理数系科目が、その後の専門科目の基礎となる重要な科目であることを十分に認識しないまま、他の科目を履修する学生が多かったため、履修ガイダンスとは別に、その履修の必要性を説明する機会も設けられた。また、その際には、看護の実践場面で活用することを目指した内容であることも、学生に周知された。理数系科目の授業の内容は、「看護のための〇〇学」として構成されており、例えば「物理学」の授業では、呼吸と胸腔ドレナージのメカニズムを、「圧」の知識を活用して理解できるような内容で実施されていた。しかしながら、説明会の開催、および授業内容の工夫がされても、履修者は増加しなかった。そのため、改訂後の新カリキュラムでは、理数系の基礎科目全てが必修科目として設置されている。また、2018年度からは、授業時間外に理数系科目の補習が設けられた。補習対象者は入学後に行われた学力試験の結果で選定され、その理解度を小テストで確認する形式がとられている。

看護職では、「患者さんとの会話から、相手の言いたいことを把握すること」、「患者や家族、医療チームとの面談内容を要約すること」、「カルテから業務内容を読み取って、正確に実施すること」、「実施した内容をカルテに記載すること」などといった国語力が求められる。文部科学省の文化審議会⁹⁾から発表された「これからの時代に求められる国語力」のなかでも、国語は、「知的活動の基盤」、「感性・情緒等の基盤」、および「コミュニケーション能力の基盤」を成すものとして定義されており、看護職はこの基盤の上に専門性を発揮することが求められる。新カリキュラムでは、「基礎ゼミナールⅠ」が設定されており、レポートの書き方、文章の読解、要約といった、基礎的な国語スキルの修得を目指して実施されている。また、他の科目でもレポートの書き方について適宜指導し、添削をして返却するなどの対策がなされている。

看護においては、様々な計算式を用いて、データを算出する必要がある。実際の臨床の現場では、電子カルテにデータを入力するだけで各種データが簡単に算出されるが、暗算もしくは手計算で、各種の値を算出できることが望ましく、本学科の授業でもBody Mass Index (BMI)、体重減少率、カウプ指数、点滴量、濃度などの計算演習が行われている。しかしながら、「分数」「百分率」などの単純な計算問題が解けない学生もみられ、それらの学生を対象に補習が行われている。

学習支援の一環として行われる学生との面談では、「何を勉強したら良いかわからない」、「勉強の仕方がわからない」といった、学習方法に関する質問や悩みを聞くことが多い。そこで、旧カリキュラムでは、「朝活」と称された

自由参加の学習会が、授業前の空き時間に設定され、教員有志による集団学習形式の学習サポートが行われた。2016年度には6回、2017年度には4回行われた。しかしながら、参加学生数は1回につき4～50名と少なく、成果はあまり得られずに終わった。そこで、新カリキュラムでは、全学年において、少人数制のゼミ形式の授業が設定され、学生個々の学習課題を早期に発見し、サポートすることが目指されている。

1年生から4年生まで、全学年の学生が揃った2017年度には、4年生に対する看護師国家試験の対策として、統合実習の担当教員による学生の個別学習のフォローが行われた。看護師国家試験では、必修問題50題のうち40題以上を正答しなければならぬため、基礎から学ぶ必要性のある学生たちへの時間外サポートも実施された。

4. 考察

看護系大学におけるリメディアル教育の今後の在り方について検討する。

4.1. 対象者の選定

リメディアル教育の対象者をどのようにして選定するかについては、入学前後に学力試験、プレイメントテストを行うことが一般的になってきている。その結果に基づいて、低成績の学生のみをリメディアル教育の対象者にするケース^{10), 11)}、成績結果は参考値として扱い、全員に履修させるケース⁸⁾、学生の自主性を重んじて申込制にするケース¹²⁾、といったさまざまなケースがみられる。医療系大学では、専門科目の理解のために、リメディアル教育的な要素も含めた初年次教育を行っている例もある^{8), 12)}。リメディアル教育を「補習的な意味ではなく、卒業まで学生が学業を進めていく上において必要な学習支援」とする谷川²⁰⁾の定義を踏まえるならば、全学年に対するリメディアル教育が必要といえる。内山¹⁶⁾は、拡大解釈としながらも、医科大学においては入学から卒業、医師国家試験合格、さらには医師としての生涯教育にまで、リメディアル教育の理念を貫かざるを得ないと述べている。これらのことを踏まえるならば、医療専門職を養成する教育課程では、国家試験合格までを見据えた全学年の学生への学習支援は必須といえるかもしれない。しかしながら、リメディアル教育の概念定義そのものが未だ混沌としており^{13), 14), 15), 16)}、リメディアル教育と初年次教育が明確に区別されずに論じられている。リメディアル教育をどのように定義するかによって、対象者の範囲と選定方法は今後変わってくる可能性がある。

4.2. 学習習慣、履修歴の確認

新入生の学習習慣・行動特性についても調査を行い、個別に対応することが重要である。濱中³⁾は、大学入試センター研究開発部による調査で、中堅進学校の生徒の平均学習時間が30分程度であったことを紹介し、現代の学生は、「さぼることができない試験」が接近しなければ、学習に時間を割こうとしない傾向があると指摘している。教員側は、個々の学生の基礎学力だけでなく、学習に対する考えや習慣、学習行動をつかみ、具体的で個性のある学習支援を行う必要がある。なお、この調査を行ううえで注意すべき点は、「ダニング・クルーガー効果」であると、高橋ら¹⁰⁾は指摘している。ダニング・クルーガー効果とは心理学用語であり、学習評価などの自己評価において、できない人ほど自己を高く評価する認知バイアスを表す用語である。学習習慣の調査結果と学力試験の成績に乖離が生じているときには、そのようなバイアスも想定され得る。教員側は、学生の学習における心理的傾向も十分にふまえて、学習支援を行う必要がある。

医学部への入学者のほぼ半数が、高校「生物」を未習の状態にあるとの報告もあり¹¹⁾、看護系大学でも新入生の履修歴には、科目および年度ごとに差がみられる^{5) 17)}。新入生の高等学校までの履修歴と苦手科目を把握することは、リメディアル教育の効果を評価し、今後の学生指導に活かすためにも重要な要素である。さらに、入学後に理数系科目と国語の学力試験を行い、履修歴と併せてその後の成績との関連性をみていくことは、今後の看護系大学におけるリメディアル教育の効果的な導入には重要である。

4.3. 教育担当者と環境整備

看護系大学の教員の場合、実習指導が長時間かつ長期にわたるだけでなく、遠方の実習地に毎日出向かなければいけない状況に置かれる場合が多い。さらに看護学生の国家試験合格は必須事項であり、4年次には、そのサポートも必要である。そのような状況下で、理数系科目を中心とした専門外のリメディアル教育を、看護教育と研究を専門とする教員が担うことは困難である。理数系科目や国語を担当している基礎教養専任教員が、リメディアル教育を担当している例もあり¹⁸⁾、長期的な観点からみれば、看護専任教員ではなく、基礎教養を専門とする教員を配置し、リメディアル教育のプログラムを運営することが望ましい。最近、日本看護系大学協議会から「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」が発表された¹⁹⁾。この到達目標を達成するためには、環境面における整備として基礎学力向上のための学習サポートセンターの設置、

自己学習スペースの確保、基礎教育専任教員によるリメディアル教育の実施、eラーニング型学習システムの開発などを早急に進めていくことが、看護系大学には求められている。

4.4. 教員間の共通認識と授業との連動性

学生の基礎学力低下の影響は、授業の進行にも影響している。教員全体で現状を多面的に把握し、リメディアル教育の意義、必要性および方法について共通認識を図ることは、リメディアル教育の具体的方法論を考えるうえで大変重要である⁴⁾。加えて、授業方法の工夫も必要である。基礎学力の低い学生に対しては、伝統的な教授法や教材ではうまく成果が上がらないことが多いため、教員には様々な学習者に対応できる能力が求められる¹³⁾。講義中心の従来の方法では、学生は受け身で授業を受けやすく、学習意欲を駆り立てるには教員側に高度な教授技法が求められる。また、語彙力、生活体験が乏しい学生は、講義の中で意味の分からない単語に遭遇しても、文脈から推測して理解することが難しく、その単語を身近な単語に安易に置き換えて誤った解釈をしていることが多いため、十分な注意が必要である。学生の学習意欲を向上させる教授技法の1つとして、アクティブラーニングの積極的導入が効果的であるとされている^{11) 13)}。アクティブラーニングとは、学生がグループの中でコミュニケーションを取りながら、学習課題を解決していく協調・協働学習のことである。アクティブラーニングの中でも、チーム基盤型学習法について尾原²⁰⁾は、学生が協働して互いに教え合う能力を育める学習方法であるため、チーム医療における人材育成に対する効果が期待できると指摘している。このような授業方法の工夫を通して、学生の思考力が強化され、基礎知識の定着が図れることが期待される。

5. 結語

看護系大学におけるリメディアル教育を概観し、本学看護学科の取り組みを振り返りながら、今後の課題を検討した。看護系大学では、理数科目と国語のリメディアル教育が実施されており、入学後の学力試験の成績によって対象者が選定されていた。一方、本学科ではリメディアル教育として理数系の科目を開設していたが、必修としなかったため、教育効果はほとんど得られていなかった。看護系大学が、リメディアル教育に本格的に取り組むためには、リメディアル教育に関する教員間の共通認識を高めるとともに、全学年を対象とした組織的なリメディアル教育プログ

ラムを構築し、学習環境の整備を含めた支援体制の充実を目指すことが必要である。

文献

- 1) 中央教育審議会. 学士課程教育の構築に向けて. 文部科学省. 2008.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
- 2) 田丸朋子, 小堀栄子, 後閑容子. 看護学部生のリメディアル教育への出席回数がちがいが理科系科目の成績におよぼす影響について. 摂南大学看護学研究. 2016; 4: 20-28.
- 3) 濱中淳子. 高大接続改革と教育現場の断層－「善意」の帰結を問う－. 教育学研究. 2016; 83: 411-422.
- 4) 松林義人, 北村拓也, 高橋明美・他. リメディアル教育の実践に向けた教職員への取り組み－中途退学および休学者の軽減に向けて－. 新潟リハビリテーション大学紀要. 2016; 5: 15-20.
- 5) 澤田忠幸. 愛媛県立医療技術大学における“入学前後における学生の学習状況”調査:リメディアル教育改善への示唆に向けて. 愛媛県立医療技術大学紀要. 2011; 8: 43-51.
- 6) 中神克之, 杉崎一美, ダニエル・カーク. 四日市看護医療大学における学習支援に関する提案－他大学における取り組みの調査と本学への導入の考察－. 四日市看護医療大学紀要. 2017; 10: 53-63.
- 7) 神崎秀嗣, 鈴木崇根, 森千里. 看護師養成大学における解剖学教育の重要性に関する一考察(解剖学教育での入学者の学力不足克服を目指して). 形態・機能. 2017; 16: 2-7.
- 8) 橋本美香, 新見明子, 黒田裕子. 日本語力向上のための初年次教育の実践－日本語教員と看護科教員の協働による下位クラスの学生に対する「文章表現」の取り組み－. 川崎医学会誌. 2012; 38: 25-32.
- 9) 文化審議会. これからの時代に求められる国語力について. 文部科学省. 2004.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf
- 10) 高橋真樹, 高橋正人, 坂本明彦・他. 薬学部新入生の学力・学修行動の実態把握調査から導いた初年次教育の注力点. 千葉科学大学紀要. 2018; 11: 9-24.
- 11) 後藤敏一, 松尾理, 伊藤浩行・他. 「生物学」リメディアル教育の効果. 医学教育. 2003; 34: 303-309.
- 12) 白戸亮吉, 吉村和法, 三田満男・他. 医療系大学の初年次生に対する学習支援の転換:自主参加型科目別演習の実践. 日本医療科学大学研究紀要. 2017; 10: 25-40.
- 13) 河内山晶子, 清田洋一. アメリカ合衆国における基礎学力向上教育の歴史. リメディアル教育研究. 2008; 3: 135-140.
- 14) 谷川裕稔, 長尾佳代子. 再考:「リメディアル教育」概念. リメディアル教育研究. 2013; 8: 43-48.
- 15) 山下研一. 入学前準備教育から卒業まで続くリメディアル教育. リメディアル教育研究. 2009; 4: 162-166.
- 16) 内山利満. リメディアル教育と学士入学制度(学士力の要請に応えるために). 東邦医学会雑誌. 2000; 47: 301-302.
- 17) 木村堅一, 津嘉山淳子, 高橋大介・他. 大学における学生支援のあり方(名桜大学の事例). リメディアル教育研究. 2012; 7: 104-108.
- 18) 財団法人日本生涯学習総合研究所. 大学の新生教育に関する現状調査. 2006.
<http://www.shogai-soken.or.jp/htmltop/toppage.files/shinyusei.pdf>
- 19) 日本看護系大学協議会. 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. 日本看護系大学協議会事務局; 2018.
- 20) 谷川裕稔. 学士力育成に向けてのリメディアル教育のあり方(特集号企画を振り返って). リメディアル教育研究. 2009; 4: 133-136.
- 21) 尾原喜美子. チーム基盤型学習法(team-based learning TBL)の紹介. 高知大学看護学会誌. 2009; 3: 37-44.

Current Status and Future Agenda Concerning Remedial Education at Nursing Universities

Motoka Masuda, Hiromi Shibuya, Ryo Imai, Akemi Yamashita, Satomi Miyamoto, Motomi Yokota

Department of Nursing, Faculty of Health Science Technology, Bunkyo Gakuin University

Abstract

Along with the arrival of the time in which universities in Japan enroll outnumber applicants by declining birthrate, the decline of fundamental academic skills of university students has become a problem. Many universities have carried out the remedial education to complement students' fundamental academic skills. In this study, we examined the current status of the remedial education at nursing universities and discussed its future agenda. Nursing universities have carried out the remedial education such as biology, chemistry and our national language. Students attending these education courses were selected by scores of examinations. In our department, we have carried out the learning support program in a small group for self-study support. However, we have not set subjects including contents of the remedial education to compulsory ones. We also have not selected students who should attend these subjects. In order to adopt the remedial education for nursing universities, it is necessary to establish a program of the remedial education for all grades and to improve the learning support system including preparing learning environment in addition to increasing common recognition about the remedial education among faculty members.

Key words —— basic scholarship, competency, learning support system, learning environment

Bunkyo Journal of Health Science Technology vol.11: 1-6